千葉大学教育学部研究紀要　第53巻　437～444頁（2005）

歴史物語からの「再生」
――『えんの松原』にみる〈少女〉の意味――

Rebirth of Historical Tales in Children's Literature : The Significance of Girlhood in *En no Matsubara*

佐藤宗子
千葉大学・教育学部

SATO, Motoko
Faculty of Education, Chiba University, Japan

再話や再創造といった行為は、他言語からの翻訳の場合のみに起こるわけではない。今回は、伊藤遊『えんの松原』をとりあげ、それが取材している平安期に書かれた歴史物語――とくに『栄花物語』と対比して検討を加えた。すなわち、翻訳の場合に類似して、そこに「現代向け・子ども向け」という意識がどのように働いているのか、という点である。主人公や「物の怪」の設定の変化、時期特定の効果、「少女」的なるものの担う意味などをとくに変更の要として考察し、さらに、古典である歴史物語と、現代児童文学の創作を併読することで、読みを多層化させうることを示した。

キーワード＝児童文学（children's literature）　再生（rebirth）　日本古典（Japanese classics）　歴史物語（historical tales）　少女（girlhood）

一

原テクストを基本とする再話も、原テクストないし何らかの資料に取材しながらより発展的な形成をめざす再創造も、ともに、読者への配慮を新たにする物語行為といえる。こうした再話や再創造は、通常、他言語からの翻訳の場合に行われることが多いだろうが、昔話などの伝承文学の領域で行われることもしばしばあるのは、児童文学ではよく知られていることである。

実はそれ以外に、古典からの再話や再創造もまた、児童文学の中には目立たぬながらに確実に存在してきた。原テクストや資料群への、対象となるべき子ども読者の知識は、他言語をもととする場合と同様、たしかに、欠如しがちであると考えられるからである。

かつて私は、翻訳や再話におけるこうした物語行為の際に、「日本向・現代向・子ども向」という意識が働くことを指摘した[1]。古典の再話・再創造の場合にも、「現代向・子ども向」の意識は、やはり同様に働くだろう。それを検証することによって、一方では、現代の子どもがそのままでは受理しにくい問題点を確認すると同時に、他方では、再話者・再創造者が、加工の対象としてなぜその原資料をとりあげたのかを考察し、ある種の理念としての「日本」「古典」あるいは「歴史」のすがたを、明らかにしうるはずである。

今回、こうした問題意識のもとに取りあげるのは、『えんの松原』（福音館書店、二〇〇一）である。『鬼の橋』（福音館書店、一九九八）でデビューした伊藤遊の第二作であり、歴史物語に取材した同作は、「あとがき」によれば、作者は十世紀中頃の実在人物を登場させてはいるが、「史実にとらわれず自由に書」いたという。

はたしてどのように「現代向・子ども向」をはかっているのか。

本稿では、まず、『えんの松原』を概観し、次に、該当する時期が描かれた歴史物語である『栄花物語』を中心に注目し、その後、提起される問題を適宜取りあげていくこととしたい。

二

『えんの松原』の舞台となっているのは、平安時代中期、藤原氏のうち北家の流れをくむ藤原師輔が、九条流の祖として後の繁栄の基礎を築く、まさに歴史の区切り目となるような時期である。

主人公は一応、今年十三歳になる音羽丸、ただし作中では音羽と呼ばれている。両親をなくし、叔母の真名賀（まなか）とともに一族である伴氏の中心人物、伴仲舒（とものなかのぶ）の屋敷に身を寄せていた彼が、ふとしたことで叔母ともども追い出され、叔母はとりあえず東国の身内を頼ったものの、彼は、伴仲舒の姉、内裏の温明殿に奉仕する伴内侍（ばんのないし）に庇護される。その必要条件が、少女に仮装することだった。

「小柄で声が細く、赤子のころから「女の子のよう」と言われつづけてきた」音羽を、ある夏の日の夕方、すぐに見抜き、「どうして、女の子のかっこうをしているの」とたずねたのが、二歳年下、現在の東宮である憲平（のりひら）親王だった。彼は、塗籠におかれた神鏡に、伯母の影を見て、助けを求めようとしたのである。

その後、伴内侍の口から事情が語られる。異母兄広平親王をさしおき、二の皇子である憲平が東宮に立ったため、広平の外祖父、藤原元方が恨み死に、物の怪となって祟っている、というわけである。憲平自身の外祖父である右大臣も、そのためか、病に倒れ、少し後には身罷ったのだった。

一方、音羽は、追い出された屋敷においてきた短刀を入手する。また、その過程で、大内裏にあるえんの松原という場所を、いくたびか通る羽目になる。怪しげな黒い鳥の巣食うその場所には、怨念が満ちているようでもある。やがて、憲平から彼に憑いている物の怪が少女の姿をしていると聞いた音羽は、えんの松原にいる鳥の中に、東宮とよく似た少女を見つける。また、東宮は胎内にあったころ、阿闍梨が「変成男子の法」という秘法で女から男に変えたとの噂も聞く。何度か危険も冒しつつ、謎をといた音羽は、憲平にいう。怨霊の正体は、「女の子に生まれるはずだったおまえだ」と。

月明かりの夜、内裏を抜け出した二人は、えんの松原に向かう。音羽の助言を受け、憲平は、旋回する鳥に腕を出し、さらに「お帰り。会いたかったよ」と声をかける。やがて鳥は少女の姿となり、憲平と少女、「顔も背の高さもまったく同じ」二人は、見つめあい、手を取り合う。

憲平は少女に向きなおると、思いをこめて言った。

「起こってしまったことを、今さらもとにもどすことはできないけれど、もう悲しまないで……」

言いながら、わずかに残った距離をつめ、憲平は両手で少女を抱きしめた。

「悲しまないでほしいんだ」

そのとき、抱き寄せられた少女の体が、白い輝きを放った。その姿はまばゆい輝きの中で形を失い、あふれる光となって彼を包んだ。ふたりがあたかもひとつになったように見えた瞬間、憲平の腕の中から一羽の鳥が飛びたった。大きく翼を広げ、風を切って上昇する。そしていったん角度を変えると、松原の上をゆっくりと旋回した。（略）

その後、東国から戻った真名賀に、伴内侍は、音羽ともども自分の引退に合わせ、宇治行きを提案する。元気になった東宮は、こっそり女装し、音羽との別れを惜しむ。

こうして、夏の数か月を背景とし、宮中を主舞台とする物語は幕を閉じる。先ほど、音羽を一応の主人公としたが、右に見るような内容から言えば、これは、少年二人が主人公の物語といってよいだろう。音羽はもちろん、主体的に行動するし、特に何度かのえんの松原体験で、危険を冒す。それに対し憲平は、まさに自己の危機に瀕しているわけだし、そもそもは彼が温明殿に忍び込んだことが一連の出来事の発端になっている。動きは少ないものの、最後に彼の自己統一がはかられて物語が収束することからも、むしろこちらがより重要な主人公だとみなせるかもしれない。

本作は刊行の翌年（二〇〇二年）、第三五回日本児童文学者協会新人賞を受賞するなど、高い評価を得て今日に至っている。

三

前節で、私はこの作品の時代背景を、とりあえず平安時代中期と紹介した。実は、物語の時間は、もっと厳密に区切ることができる。中古文学に少し親しんでいれば、きわめてたやすい。「憲平」という名が出てきた瞬間、大体の時代がわかり、そして彼の祖父である右大臣が病み、作中でなくなることで、決定的となる。憲平の外祖父、藤原師輔が亡くなったのは、天徳四年（九六〇年）夏、五月四日だからである。

このあたりの事情は、歴史物語のジャンルに区分される作品のうちでも、『栄花物語』に詳しい。周知のように、紀伝体をとる『大鏡』に対し、『栄花』は編年体をとり、六国史を受け継ぐ意識の下に仮名で書かれたもので、物語風史書といった言い方もされる。ここでは、「新編日本古典文学全集」（小学館）所収の全三巻によって、本文から適宜関係する部分を見ていくことにしよう。[2]

巻一「月の宴」では、村上帝の治世について、時を追って語られていく。

まず、藤原元方の女による一の皇子誕生については、「元方の大納言いみじと思したり。（略）何のゆゑにか、わが御子、東宮にゐ誤ちたまはんと、頼もしく思されけり。」と述べる。その後、「九条殿の女御、男御子生みたてまつりたまひつ。」という事態が出来すると、「元方の大納言かくと聞くに、胸ふたがる心地して、物をだにも食はずなりにけり。」となる一方、九条殿では「大臣の御心の中思ひやるに、さばかりめでたきことありなんや。」となる。そして憲平は、「生れたまひて三月といふに、七月二十三日に東宮に立たせたまひぬ。」幼い東宮は、「いみじくうつくしうおはします」様子である。

そんな中で、元方はこの世を去る。「そのけにこそはあめれ、東宮いとうたてき御物の怪にて、ともすれば御心地あやまりしけり。いといとほしげにおはしますをりありけり。さるは御心地うつくしうきよらにおはしますことかぎりなきに、玉に瑕つきたらんやうに見えさせたまふ。」そしてこの後、物の怪は長く憲平にも、他の関係者にも付きまとう。

しかし、『栄花』では、師輔薨去にこの物の怪が関与しているとは描かれない。「九条殿悩ましう思されて、御風などいひて、御湯茹でなどし、薬きこしめして過ぐさせたまふほどに、まめやかに苦しうせさせたまへば」といったかたちで、天徳四年五月四日に亡くなる。なお、たしかにこの年、東宮は数え十一歳である。そしてこの頃から、「東宮の女御も、宮の御物の怪の恐ろしければ、里がちにぞおはしましける。」といった記述が時折見られる。物の怪がついているのが、常態化していたようである。

三年ばかり後、東宮の母である藤原安子が、懐妊中に容態が悪くなる。ここで、元方の霊がはっきりと姿を現す。「御物の怪どもいと数多かるにも、かの元方の大納言の霊いみじくおどろおどろしく、いみじきけはひにて、あへてあらせたてまつるべき気色なし。東宮をもいみじげに申し思へり。東宮も、いかにいかにと、おぼつかなさを思ひやりきこえさせたまふ。」引用最後の文章でわかるように、ある物の怪は一度に多数の人につくことはできない。したがって、ふだんは東宮についたままの元方の霊が、安子につくと、その間は東宮は正気に戻っているというのである。そして母が死ぬとまた、「東宮も、御物の怪のこの宮にまゐりたれば、例の御心地におはしませば、いといみじう悲しきことに惑はせたまふもあはれに、見たてまつる人みな涙とどめがたし。」

東宮の数え十八歳の年、村上帝は病が重くなるが、御読経なども効果がない。「例の元方の霊なども参りて、いみじくののしるに、なほ世の尽きぬなればこそ、かやうのこともあらめと、心細く思しめさる。」五月に帝は崩御し、東宮憲平が即位する。これが冷泉帝である。「帝、例の御心地におはしますをりは、先帝にいとよう似たてまつらせたまへり。御かたち、これは今すこし勝らせたまへり。あたら帝の御物の怪いみじくおはしますのみぞ、よに心憂きことなる。」

結局、この物の怪が原因ともなり、彼の治世は二年ばかりの短さで終わる。女御たちが里がちである一方、「さるべき殿上人、殿ばら、たゆまず夜昼さぶらひたまふ。」状況では無理もなかろう。弟の守平親王が、十一歳で円融帝となる。

巻二「花山たづぬる中納言」以降、院となってからも物の怪は相変わらずだが、男皇子ももうけ、「例ざまにおはします時はいとうれしきことに思しめして、よろづに知りあつかひきこえさせたまひけり。」と、ふつうであれば子煩悩であった様子が窺える。ただ、冷泉院の女御超子（藤原兼家の女、師輔の孫）にも、難は及び、彼女は突然亡くなってしまう。「なほこれもかの御物の怪のしつるとぞ、思されける。」といった気の毒な次第である。

巻三「さまざまのよろこび」で冷泉院の近況が語られる折には、側に仕える者た

ちに、気前よく御衣や御衾などを下げ渡す様子がかかれる。また、「三、四の宮など、たまさかにも参らせたまふをりは、いみじうめづらかにうつくしみたてまつらせたまひける。されど御物の怪のいと恐ろしければ、たはやすくも参らせたてまつらせたまはず。」と、年下の男皇子たちとの関係が描かれている。そうした愛情のゆえにか、巻七「とりべ野」で、三の宮である為尊親王薨去の折には、「冷泉院ほの聞しめして、「よにうせじ。よう求めばありなんものを」とぞのたまはせける。あはれなる親の御有様になん。」と、同情を誘うような記述もされる。

結局彼は、巻十「ひかげのかづら」で病悩とそれに続く崩御が描かれ、一生を終える。ふだんから物の怪がついているだけに、むしろそんな時に伺候して見分けられてしまうとかえって無気味である。そこで大殿の道長も、「急ぎ出でさせたまひぬ。」また、気遣って見舞いたいという帝（三条帝）を、「（略）御物の怪いといと恐ろし。見たてまつらせたまふとも、御心の例におはしまさばこそあらめ」などと言上し、止めているほどである。寛弘八年（一〇一一年）、冷泉院は六十二歳で世を去った。

物の怪はその後、三条帝にもついたようで、巻十二「たまのむらぎく」にも関連する記述があり、巻十三「ゆふしで」の崩御まで影響はあったようだ。（ただ、そこでは元方のみならず、他の霊も登場してくる。）

さて、こうして『栄花物語』に即して見てくると、少年憲平の行く手に待ち受ける運命は、なんとも重苦しいものに思えてくるかもしれない。また、祖父である師輔の病や死に、元方の霊が関与していないのが不思議に思われるかもしれない。そこで、もう一つの同時代を記した歴史物語、『大鏡』をも、覗いてみることにしよう。こちらも、小学館刊行の「新編日本古典文学全集」所収による。[3]

『大鏡』での師輔といえば、よく知られているのは百鬼夜行にあった、というエピソードだろう。気配を感じ、車の簾を垂れさせ、さらに尊勝陀羅尼を読誦して難を逃がれたという。つまりは、それだけの胆力も知力も備えている人物の証と捉えられる。これに続く記述に、元方との双六の話が出てくる。

「元方民部卿の御孫、儲の君にておはする頃、帝の御庚申せさせたまふに」という時期のこと。九条殿もやってきた。そして「攤（だ）打たせたまふついでに、冷泉院の孕まれおはしましたるほどにて、さらぬだに世人いかがと思ひ申したるに、九条殿、「いで、今宵の攤つかうまつらむ」と仰せらるるままに、「この孕まれたまへる御子、男におはしますべくは、調六出で来」とて、打たせたまへりけるに、ただ一度に出でくるものか。」という強運の持ち主である師輔は、その予兆のとおりの結果を得る。これに対し「この民部卿の御気色いとあしうなりて、色もいと青くこそなりたりけれ。さて後に、霊に出でまして、「その夜やがて、胸に釘はうちてき」とこそのたまひけれ。」というわけで、どうも、両者の格の差のようなものさえ感じさせられてくる。

『栄花物語』も『大鏡』も、もちろん、現在の私たちが把握している史実をすべて承知して歴史叙述をしているわけではないし、それぞれの書なりの執筆方針もあっただろう。だが、それをもって、現在の視点から客観的でないとか合理的でないと指弾するのは妥当とはいえない。その時代なりの合理性のもとで、歴史意識が働いていたはずだからである。そこでは物の怪の存在も、強運を招き寄せる出来事も、ともに事実として受け止めうるものなのである。

ちなみに『国史大事典』（吉川弘文館）で藤原元方（第十二巻所収、一九九一）の項にも、冷泉天皇（第十四巻所収、一九九三）の項にも、霊にまつわる記述がある。前者では「悲嘆のうちに没した元方は、怨霊となって冷泉以後歴代の天皇に祟ったとされる」、後者では「その狂気は元方の祟りといわれ、治世は外戚の師輔流藤原氏の勢力伸張に利用された」とあり、まさに歴史の流れの中でその「物の怪」は働きを示したことになる。

四

歴史物語から関連する記事を見てきたが、では『えんの松原』では、何が、どう、変えられているのか。いくつかの点を順に取り上げて、問題を整理してみたい。なお、「新日本古典文学全集」（小学館）所収の『今昔物語集④』（馬渕和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳、二〇〇二）と、『平家物語①』（市古貞次校注・訳、一九九四）を途中で参照することにする。

まずは表題にもなっているその場所に巣食うものの正体だが、これが黒い「鳥」になった。もともと怪しげなものの居場所として、説話集にも登場するが、そこで出てくるときは、「鬼」であったり「狐」であったりするようである。

たとえば『今昔物語集』を繙いてみよう。巻第二十七の「内裏の松原に於て鬼人の形と成りて女を噉らふ語第八」が、まずは該当する。頭注の概略では「光孝天皇

の御代、仲秋名月ころの夜のこと、武徳殿の松原を通りかかった若い女連れ三人のうちの一人が、男に松の木陰に誘われたまま戻らず、不審に思った連れの二人が近寄ってみると、女は足と手を残したまま鬼に食い殺されていたという話」である。また「宴の松原は妖狐などが出没する怪しげな場所として著聞する」とも記されている。たしかに、同巻の「狐女の形に変じて播磨康高に値ふ語第三十八」は、これもその頭注から紹介すると、「九月中旬の月明りの夜のこと、宴の松原で顔を扇で隠した絶世の美女と出会うが、これは有名な豊楽院周辺に棲息する妖狐のしわざと怪しみ、追い剥ぎを装って刀を抜いて脅したところ、美女は悪臭を放つ小便をひっかけるや、狐と変じて逃げ去った話」であるし、巻十四第五話も関連する話とされる。先の二話と違い、その「野干の死にたるを救はむが為に法花を写す人の語」では、男の供養により死んだ狐は、無事に忉利天に往生したという情味を持たせた話となっているが、その前段では、やはり主人公の男と女に化けた狐とは関係を持っている。

つまり、『今昔物語集』のこれらの話からは、えんの松原付近に巣食う妖しいものとは、「性」を連想させる身体的な脅威の存在と考えることができる。

それに対し、『えんの松原』でそこに巣食うのは、鳥たちである。無論、音羽が目撃し、あるいは聞きとったそれらは、男女混じり、たとえば恨みを残してこの世を去ったときの年齢もはっきりはしない。しかしそれでも、そうした心情のみが結集して、鳥の姿をとらせている、といった印象にしあげられている。ましてや、肝腎の憲平に着いている鳥は、少女の姿に変わる。そう、ここでは、男―女という、成熟した存在の対は登場しない。「性」を排除した少年―少女という関係として、そしてその精神性が、「鳥」の形をとることで、問われているのである。

それに関しては、別の点にも触れておくべきだろう。いわゆる「もう一人の自分」が主題となる作品は、児童文学ではしばしば見受けられるが、この『えんの松原』の場合、「変成男子の法」が行われた結果としてその問題が浮上してきたとされる、という点である。すなわち、阿闍梨の修法により、安子の腹中の子は男皇子となって、憲平が生まれたことになる。上級貴族の家ならば女子誕生が歓迎されるものを、その女子が成長して入内すれば、今度は男子誕生ばかりが祈念される。帝位をめぐる争いゆえの必然といえばそれまでだが、こうした背景が、「もう一人の自分」という存在が否応なく生み出されてしまったという物語の骨格を、無理なく作り上げているように思われる。（これらの修法のあり方自体、もともとの仏語での「変成男子の法」とは意味が異なっているが、その点についてはここでは触れない。）

なお、こうした行為については、後の『平家物語』にははっきりと、巻三の「赦文」で、中宮徳子の懐妊の際、天台座主覚快法親王が「変成男子の法」を修せられたとの記載が見られる。資料の性格にもよるだろうが、少なくとも『栄花物語』や『大鏡』などの歴史物語には、憲平についてのそれに類する記事は見受けられない。つまり、修法についての歴史的叙述の有無はともあれ、この作品ではそれが要として用いられた点が、興味深い。

また、それでいて性的には未分化の時期が選ばれているのみならず、もともとの身体的特徴からも十分、少女との互換性を想像させうる点も、目立たないが人物造型の上では注目すべき点であろう。前節の引用からもわかるように、実際にも憲平は、父村上帝にも似て、というよりそれ以上であって、本来は見目かたち麗しい、好ましい帝の一人となるはずだったのである。

他方の音羽については、これは想像上の人物であるから当然ではあるが、「小柄で声が細く、赤子のころから「女の子のよう」と言われつづけてきた」との設定がなされ、少女への仮装を自然に導く。そればかりでなく、「十三歳の音羽でさえ少女と見まがう」ことが、「二歳年下の東宮憲平が、「生まれなかった可能性」としての「少女」である分身をひきずっている」曖昧さや混沌といったものを、より強く読者に印象付ける効果を果たしてもいると考えてよい。

さらに、物の怪の内実の変更も、重要な改変である。元方の霊の強力さは、これも前節の引用からも明らかだろう。先ほど少し言及した『平家物語』の場合も、中宮徳子懐妊記事の続きで、怨霊の恐ろしい先例の一人として、元方の名をあげているほどである。ところが、『えんの松原』では、元方の霊はただに師輔に祟る、のである。いわば、権力抗争をするのは男性貴族たちであり、喜怒哀楽の感情が向かう相手も、その範囲のみであるかのように。

これも、引用からも明らかなように、元方の霊は安子と村上帝に、そして東宮憲平＝冷泉帝に、そのほか冷泉帝女御超子や花山帝、三条帝など、実に長くしぶとく、祟り続けた。歴史的にも有名なこの事実から離れ、「物の怪」現象を、権力者同士の抗争と、人間の自立の問題に分離して描くことにした点は、歴史物語に親しんだ者には、相当な驚きとなるだろう。

細かいようだが、「物の怪」造型の変化にも目を留めておきたい。そもそも「物の怪」は、特定の誰かにとりつく。だから、ふだんはAについていても、一時的にBにつけばその間Aは正気に戻っている。だが、憲平の場合は、違う。「生まれなかった可能性」である「少女」の霊は、居場所として「えんの松原」を持っている。そして、物語終盤では、少年たちが自分からそこへと足を運ぶ、つまり行動を開始することによって、両者の対峙が起こる。すなわち、彼女は「待っている」存在なのである。この点は、もはや古典の「物の怪」からは離れ、「もう一人の自分」との間における主体性をめぐる展開という、「近代的」なテーマの優勢を認めたほうがいいかもしれない。そこでの「少年」＝行動、「少女」＝待機を、どう考えるか。ここではこれ以上深入りはしない。また、あまり問題を短絡的に捉えすぎてもいけないだろう。もともと歴史的人物から主人公を選んだことによる制約、ととりあえずは見ておきたい。

『えんの松原』の改変・創造に関して、いくつかの点から考えてきた。それらを通してみえてくるのは、巧妙な「性」の排除による、東宮を精神的に悩ます自己存在の危機の問題――それへの焦点化である。そして結びの場面で、音羽は「少年」の姿に復帰し、憲平は彼に直接別れを告げるためにあえてはじめての「女装」をする。平然と外面的な「女装」をしたということは、内面での彼の「統合」が確かに成就したことを象徴的に示しているようにもとれる。

多少の資料との対比をしながら、『えんの松原』の特徴を見てきたここまでの検討からも、歴史的な場を借りながら「自己」をテーマとした作品として、児童文学では比較的おなじみながらも設定に特色がある、といった捉えられ方ができよう。もし資料の存在を知らないなら――実際には、大人の読者であってもこの方面の知識が少ない場合は大いに考えられる。現に、ある研究会の席上で、憲平も想像上の人物だとばかり思い込んでいた、との発言も聞いたことがある。そうした読み方を仮定するなら、より強く、ファンタジーの要素が浮き立つ。舞台が仮構されることはファンタジーの常套である。歴史性は薄まり、少年の「成長」をテーマにした向日的な、まさに理想主義的な典型例とも思えてくるだろう。

だが、再度歴史物語とあわせ見ていくなら、そうした面からうけとるのとは違った本作品の味わいが出てくる。哀れさといったらよいだろうか、そんな感情である。

先に述べたように、この作品の舞台となる時期は、天徳四年（九六〇年）の夏に限定されている。憲平については、東宮という呼び方とこの本名のみが出てくる。「あとがき」も含め、彼が後に冷泉帝となることは巧妙に伏せられている。史実を照合させやすい帝としての名を出さないこのやり方のおかげで、作品で描かれた範囲の時期においては、彼は無事に「もう一人の自分」を統合したこの後、やがて立派に帝となっていくことさえ、想像することが可能である。

母の安子や父の村上帝にこれ以上言及すれば、彼らの最期に元方の霊が登場した事実もあわせて喚起されてしまう。さらに、亡父の後を受けて「冷泉帝」として即位したことも、彼にとりついた「物の怪」ゆえに摂関政治の進展にはからずも寄与してしまったことも、同時に意識に上らざるをえない。彼の息子たち、花山帝や三条帝にまつわる不幸――前者の突然の出家や、後者の眼病（もっとも『栄花物語』ではこの件にはふれていない）――も、思い起こされるだろうか。

すでにこの時代を知っている者だけでなく、たとえばこの作品に啓発され、古典である歴史物語に手を伸ばすとするなら、ただちに、こうした状況を知ることができる。この時点の三年後には、憲平は元服し、昌子内親王の東宮参りも決定、さらに母である中宮安子の懐妊から翌年の出産・逝去まで事態は大きく動く。「物の怪」にとりつかれた帝となるのも間近い。そう知れば知るほど、読者の心には、少年憲平に対する哀切な思いが湧いてくるだろう。史実を知っていてもなお、一瞬、この時期には作中で描かれたような、冒険と友情の交換と内面の統合・自立の、少年としての日々があったと考えたい。それほどに、作品の設定に選ばれたこの時期の貴重さを知る。

古典としての歴史物語と、歴史物語からの「再生」としての児童文学作品。この二つを対比させてみることが、限られた時期の憲平像への関心を高め、多層的な照明効果をあげさせる。

『えんの松原』は、そのまま、いわゆる歴史ファンタジーとしてのみ読むこともできる。他方、古典と本作の併読というかたちをとるなら、両者の重なりとずれから、あらたな「再生」効果が生ずる。ここに、古典に取材した作品ゆえの特質をみることができよう。

五

歴史に取材して作品創造を行うことは、一般に、ある困難を伴う。現代の観点か

らは承服しかねるような人物造型や事件の展開を、しばしば迫られる、という点である。『えんの松原』も例外ではない。すでに検討した中でもふれてきたように、少女性にかかわる設定は、現代の読者に多少の違和感を覚えさせるのではないか。なにせ、自己に悩み、行動し、一時的に身をやつすしかけとして「女装」する少年と、生まれなかったことそれ自体ではなく、「望まれて男に生まれながら、それをちっとも喜ばないあの子（引用者注、憲平）の無念に、わたしはつなぎとめられる」と、どこまでも受け身の存在でしかない〈少女〉という対比が、目につくのだから。

『日本児童文学』二〇〇二年七・八月号には、本作が日本児童文学者協会新人賞を受賞した際の選考評が掲載されているが、たとえばそこで藤田のぼるは、「副主人公憲平にとりつく怨霊の正体があまりにも明快に説き明かされてしまっているのではという感もあった」と述べる。少年の対としての「影」が少女である、と絵解きしてしまえば、たしかに彼の言う不満が出てくるだろう。そこに、右に指摘した対比の構図が、安易にみえかねない理由もでてくる。

その一方で、ほかの選考委員の一人、長谷川潮は、この作品を「一義的には怨霊が生きていた時代の物語なのかもしれないが、きわめて現代的な作品でもある」とし、子ども像にも、また「ジェンダーを基本モチーフとしているところにもそれが示されている」という。長谷川は「多様な読みを可能にする」点も認めているが、右の言い方からは、やはりモチーフにひかれるような現代性重視の傾向と捉えているように見受けられる。

かりに現代に力点を置いた読み方をするにしても、やはり念頭に置くことが妥当だろう――これが、まぎれもなく歴史のある一時期に無理なく収められる物語であることを。

現代児童文学で歴史に取材した作品群というと、多分、「歴史小説」などと称されるような、日常的な世界を描いたものが、思い起こされるだろう。一九六八年から刊行開始となった「少年少女歴史小説シリーズ」（岩崎書店）には、来栖良夫『くろ助』（一九六八）や浜野卓也『堀のある村』（一九七二）など、このジャンルの代表として知られる作品がいくつも収録されている。なかには遠藤寛子『算法少女』（一九七三）や『米沢英和女学校』（一九八一）など女性が中心に位置する作品もないではないが、他はおおむね、何らかの形で歴史に名を残した男性の手がかりをもとに物語が構想されているといってよい。来栖良夫の短編集『江戸のおもちゃ屋』（一九七〇）のなかには、平安時代の女性を主人公にした「平安少女」があるが、これは基本的には、あの『更級日記』の現代語版再話である。あるいは、それでしかない、というべきか。

近代以前の時代を舞台にするとき、ある程度歴史に取材しようとすれば、どうしても少年を行動的に設定せざるを得ない。読者は「少年少女」双方であることも考慮し、せいぜい少女を何らかのかたちで配する、といったあたりが、一世代前のまずありうる手法であった、とも考えられる。その結果が、そうしたシリーズの実態にもあらわれたわけである。

だが、そのことを逆手にとることも可能なはずである。むしろ限定的なかたちでの「少女」的なるものを提示することにより、当該の時代に深く根ざし、物語としての享受をすすめるのみならず、読者の関心を歴史的事象に回帰させることをめざす――そんなことも、できるのではないか。ジェンダー問題にしても、そうした歴史把握あってこそ、はじめて読者自身の課題ともなりうるだろう。もちろん、そこまでを読書から得ようとするかどうかは、本来読者に委ねられる部分であるのだろうが。

『えんの松原』が、ヤングアダルト以上の年齢の読者にとっても、そのような歴史への誘いとなる可能性を持つことは、次の例からも明らかである。すなわち、二〇〇四年七月にインターネットで検索をしたところでは、東京の成蹊大学文学部のあるセミナーで、この作品が参考書に取り上げられている。（七月二四日時点での、同大学シラバスによる。ちなみにテキストとされているのは、文庫版の『大鏡』である。）平安時代の歴史や都市、逸話、人々の観念などを考察していく第一歩として、まず本作を読むことが指示されているのである。子どもや中・高生だけではない。大学生、いや場合によっては広く一般読者にとっても、そうした歴史や古典への手がかりとして、本作品は意味を持っている。

まったくの虚構世界の構築とも、単に借景として舞台を使うのでもなく、ある時代の事実、現実に基づいて作品世界をつくること――それが、読者にとって新鮮な刺激となりうる。それは一方で物語の領域を広げる試みであり、他方、ある時代のさまざまな制約や限界を、あえて露呈させるよう、試している。

歴史物語からではないが、やはり平安期の作品に取材した歴史ミステリーが、二〇〇三年に一般書として刊行されている。第十三回鮎川哲也賞を受賞した森谷明子

のデビュー作『千年の黙』（東京創元社）である。『枕草子』に出てくる「上にさぶらふ御猫」にまつわる第一部と、紫式部執筆の『源氏物語』の「かかやく日の宮」の巻にまつわる第二部からなるが、いずれも女童あてきをはじめ、女性たちが主要登場人物となる。しかも謎解きには、子どもの価値観がうまく生かされている点も、児童文学の立場からは興味深い。古典に取材した作品として、今後、対照させてみていくこともできるだろう。

古典の歴史物語と、児童文学の創作を、併読し、相対化させあうこと。そこから、歴史物語がいかに「再生」されたか、また今後もさせうるかが、見える。

（1）小著『「家なき子」の旅』、平凡社、一九八七。

（2）山中裕、秋山虔、池田尚隆、福長進校注・訳、同全集第三一巻の『栄花物語①』（一九九五）及び第三二巻の『同②』（一九九七）による。なお、表記は私に改めた。

（3）橘健二、加藤静子校注・訳、同全集第三四巻の『大鏡』（一九九六）による。表記については右に同じ。

＊本稿の骨子は、日本児童文学学会第四三回研究大会（二〇〇四年十一月七日（日）、東京学芸大学）で発表した。

＊本稿は、平成十六年度科学研究費補助金基盤研究（C）（2）「受験用古典からの脱却を図る新しい時代における教養教育としての古典教育に関する研究」（研究代表者＝寺井正憲）の研究成果の一部をまとめたものである。